

神
近
市
子
文
集
1

ミ 三十五年 " 四十四年 " 五十六年 (二九八一)	七十二歳 八十一歳 九十三歳	『エロシエンコと金魚』 十二月 第三十二回総選挙を機に引退 八月一日午後五時 永眠す
(この略年譜は『神近市子自伝』昭和四十七年講談社刊より引用し、一部訂正加筆した)		

神近市子文集

目次

買われて行く娘	1
村の反逆者	21
豚に投げた真珠	75
長崎再遊記	101
エロシエンコと金魚	121
二分 ^{ぶん} の一伝・幼い日の神近市子	155
鈴木れいじ	
年譜	199

買われて行く娘

喜代は、きりっとひきしまった体をした内気な娘であつた。父親似の立派な額と高い鼻の持主で、きめこまかな青磁のような肌が、村の百姓の娘達の間でひととき目立つた。内気ではあつたが、しっかりした気性の娘で、貧乏な家に生れた美しい娘に、ともするとかもし出される村人の嫉みとも軽蔑ともとれる感情をやわらげた。

小さな丘の裾にあつた私の家から、いくばくもない丘の中腹の小屋に住んでいた貧しい農夫の長女であつた。父親は酒好きの飲んだくれで、ある冬の雪の日に酔つた父の夫婦喧嘩のあげく母親と一緒に家をしめ出された。

飢えと寒さで震えていた十二歳の喜代を、私の母が見かねて連れてきて、その時分、まだ五つになつたばかりの私の遊び相手にして家においた。

私の父は医者であつた。田舎では、診察をうける人も薬をかう人も、見知りごしの

人である。それで人々は、私の家にくると母がいる茶の間に通って、待つ間のつれづれを過すのが常であった。母はそれらの人の相手をするために朝の食事がすむと、私を喜代の手にわたすのであった。

「お御、今日はどこへ行きますな」

喜代は、私を背中に負うて外へでると、相談するように振りかえっていった。

「鮒釣りに行こうや」

私は嬉しくて、喜代の背中とびあがる。

遊び場がきまると、喜代は物置の隅から釣道具をとり出し、私の小さな草履も一緒に持ち、村はずれの海に近い用水堀に出かけるのであった。用水堀の辺りには、ここここに切り石の投げすてたのがあり、その石の一つに腰をおろし餌をつけた釣糸を投げると、鮒が水面近く群がってきた。

「そら釣れた！」

ウキが動いたかと思える間に、喜代が引上げた釣糸には、鮒が口を開いてあえいでいた。かすかな風が用水の上を吹いて、稲田の早苗をそよがせていた。

私は、母の傍にいたくてならず、母にまつわりついているような時にも、喜代が顔を見せると

「それはなあに？ 喜代」

と、喜代が手にしたザルをのぞく。

「山にわらび取りに行きまっしょ。花も摘んであげますて」

と、さそいだされる。後ろの丘には、陽光があふれ、若葉は燃えたち、放牧の牛がものうく鳴いていた。

木かげの草地で、喜代は石路の葉で花冠りを編んでくれた。

「これはなに？」

「これはな、内裏様のお嫁様の頭にのせるものでござります。出来あがったらお御の頭にのせてあげます」

「ではおれが、内裏様のお嫁様になるのだわナ」

「そうでござす」

私は、とても嬉しくて、喜代のさし櫛で髪を梳いたり前を合わせたりした。

花冠りができあがると、私の頭にのせ、私をまじまじと見つめて、喜代は自分の手

による作品を楽しんでいた。私の頭は、野生の花の香りに包まれていた。

「お御、内裏様はどこにござるのですろ？」

「博多か、大阪かも知れんワ」

「大阪だの西京だの、人がたくさんいて賑かなことじやする。一生のうちに一度は行ってみたいもんですワ」

喜代は、憧れるようにこういったが、幼い私には、そういう感情はまだわからなかった。

「遠い、知らない人ばかり居るところが、どうして面白いんね。おら嫌いだワ」

喜代は、口ごもって何もいわなかった。

雨の日には、私達は隣りの仏師屋の仕事場で遊んだり、清吉の家へ行ったりした。清吉は、私の家に長く出入りしていた百姓で、清吉、お峰の夫婦とも好い人であった。私達は、そのひとり息子の子清と遊んだ。

清造は、齒並びの美しい青年で、喜代より四歳年上で、村の高等小学校を優等で卒業した後、百姓の子は百姓に、という父親に従って、農業に精を出していた。気の利

いた才走ったところはなかったが、素直で篤実な好青年と村中の評判であった。

雨の日には、清造は納屋で草履を作った。むしろの上に両足を出して坐って、器用に草履の台を編んでいた。

「清造やん、草履をつくっておくれ」

私が、不意にその肩にとりついていうと、

「つくってあげまっしょ。お御はいつまでもここに待つとるので。昨日、鼻緒にする紅紙をかうとききましたからな」

清造の手織縞の紺の香りが匂うのであった。

そして、清造は、私の背後の喜代の方を見た。喜代は、目の縁を赤くしてほほ笑んだ。私は、喜代は嬉しいのだなと考えた。

時によると、私達三人が草履作りをしている納屋に、近所の人が通りかかり、わざわざ軒下に傘を入れて、清造と喜代に、

「仲よくやっているぞ」

と、笑いながら声をかけたりした。

喜代はもう顔を赤くして、涙さえ目に浮べていた。

「喜代、どうしてあんなにいうの。私達はお友達じゃろ。お友達と一緒に遊んでなんで悪いの」

「なんで悪いんか私も存じまっせん」

そして喜代は、私を抱きしめた。

こうして草履を三人で作っている時に、ある日、喜代が小さな声でこういつていたことがあった。

「新田のお直やんが、清造やんに添わるるなら、三年石の上に寝たってもよえって」

「どこでそれをいうたろか。ばかな女もあるもの。他人が何とかいうて、おれがいやな思いをするって知らねえのかね」

「それでも思いあまるということもあるわな。それにお直やんはおとなしい上に、裁縫もよくできるに……」

清造は、喜代のいうことを打消すようにいった。

「ああした金持の家のは、おらは好きでねえさ。お直もおらの家よりも金のある家に生れたという気があるで、自分の口からそうしたことをいう気になつたら。お

らの気持は、喜代やん、わかつとるだね」

念を押すような強いいい方であった。私は、喜代が急に高い動悸のためあえぐように呼吸するのを見た。

草履ができて帰る頃には小半日が経っていた。

「喜代やん、草履をはき料にもってゆかねえか」

「いやワ、小母ちゃんに悪いから」

喜代は清造の母親の思惑くよりも、十年近く私の家の台所で働いているお仲に、何かいわれることを気にしているらしかった。

私が八歳で小学校に上る頃から、喜代はお仲の手伝いとして台所で働きはじめていた。

喜代の両親は、その頃は、村はずれの小屋に住んでいた。父親が酒に溺れて家を忘れたのは、貧乏に生れて早く親を失い、いくら働いても浮び上がることができないこの世のせち辛さと、何をして一人前に出来ない女房への失望による自暴自棄の深酒と、私の母は同情の目で見えていたようである。それでも酒乱は、年と共にひどくなり、一日働けば一日飲んだくれて家族がその日の米に困ろうが顧みぬ風であった。た

だその時分には、子供達もようやく親の手をはなれるようになっていたので、母親が大きな百姓家や商家の手が足りないところに頼まれて働きに出ていた。少し足りないところのある女、何をやらせても手ぬるい日傭い女であつたので、いくらになるのもなく、ただ使う方で食べ残りを持たせてかえす、それで子供達は大きくなっていった。それが、農閑期などに働き口がなくなると、二日も三日も食べる物がなくなることがあるらしかった。そんな時には、五つと七つの男の子を先に立たせて、私の家の台所口から入ってくるのであつた。

こうした場合、私の母は、喜代の母親に多くもなく少くもない金（喜代の給料の前借りではなかつた。喜代の前借りはもう何年かふさがつてしまつていた）を渡すと、喜代を呼んで裏の縁先で食事を出させた。十二歳の時以来、私の家で大きくなつた喜代は、生みの親にも親しみをもたない風であつた。ただ肉親ということを冷く意識しているだけで、人並みでない母親をいたわる風もなく、食事を欠くことはあつてもむせかえるような生命力で育っている弟達に望みをかける風もなかつた。すべてを悲しく眺め、心のどこかで感情をおし殺し、冷やかに目をしてしている風であつた。そして、母と弟達は、そういう喜代の目の前で、ガツガツと咽喉を鳴して飯を食べ汁を飲

んでいた。

秋の末であった。寒い西の風が戸外では荒れていた。夕飯のあと片付けがすんで、広い台所の囲炉りの側で、風呂あがりの私はお仲を相手に遊んでいた。囲炉りには火が真赤におこり切って、自在かぎの先にかけられた夜食の甘藷がおいしそうに煮立っていた。人形をこしらえてくれるお仲の側で、私は出来た人形にありあわせの着物を着せたり脱がしたりしていた。

「知美ちゃ、お祖母さんが、もう寝るってよんでおいでるわ」

母が茶の間の唐紙をあけて呼んだ。

「うーん！」

私は、うなずいて返事をしたが、腰を起そうとはしなかった。

「早くお寝んと湯上りだから風邪をひくわ。よい子だから早くお休みなさいね」

母は、私が容易に起きあがりそうもないことを見ると、そこを去らないでこういった。

「では、お御、今夜、お仲がたくさんこさえておきますで、お母ちゃまのいうこと

を聞いて早うお休みなさいませ」

お仲が、人形の手をとめてこういうので、私も寢床に行くよりほかはなかった。

「では、きつとよ。指切り！」

私は、くすぐったがって笑うお仲の手を無理に引出して指切りをすると、母が開けておいた茶の間の方に出ようとした。

すると上りかまちに喜代が、土間の暗いところを向いて腰をおろしていた。さつきからそこにいたことを誰も気づかなかったほど黙っていたことも変であったが、今、私が寝に行こうとするのに、平生のようについて来ないことも私には不満であった。私はわざと喜代の側を通して茶の間の縁側に出たが、うなだれたままであった。その時、私は喜代は泣いているのではないかと考えた。

離れで、祖母は寢床の中で私を待っていた。私は、着物をぬいで敷いてあった床にもぐり込んだ。

「お祖母ちゃま、喜代があつちで泣いたりしましたよ」

私は祖母が、喜代を可愛がっていることを思い出して、こう話しかけた。そして、祖母の様子が平生と変っているの、喜代が泣く理由を知っていいような気がした。

「ああ、喜代は、お友達が遠いところへ行ってしまうので泣いているのです。そんな時には誰だって同じように悲しいのですから。明日になっても無理をいうて、喜代をいじめないですよ」

祖母は、私が喜代によく甘えて困らせることを知っていた。

「もういじめません。でも、お祖母ちゃま、清造はどこへ行きますの？」

祖母はちょっとびっくりしたように私の顔を見たが、少したつと閉じていた目をあけ低い声で独り言のようにいった。

「清造が、兵隊にゆくことになったので、新田のお直が清造の嫁にくるのです。それで喜代は泣いているのです」

祖母はこういうと寝返りを打って向うをむいてしまった。私は、これ以上話しをしない積りだなと考えた。

旧の正月にお直は、清造の嫁になった。
その正月で喜代は、十八になっていた。

私の母は、喜代のよい嫁の口をさがして来年あたりまでには嫁にやるつもりだと、誰れかに話をしていた。喜代は、以前と同じようによく働き、内外となく仕事に精を出した。いつか台所の隅で、ひっそりと泣いていた時のほか、私は喜代が泣いたことは二度と見なかった。そして一体に口数の少ない喜代は、その頃から一段と沈黙がちになったが、その分、頭は鋭くよく働いた。父や母の側にいる時など、何をいわれどもかたんな受け答えしかなかったが、その代り父や母の気持を察知することは誰よりも早かった。その娘らしからぬ苦勞性と、浮きうきとした晴れやかさのない点が、母の苦勞の種でもあった。

「ほんとに、もっとぼんやりしていてくれるとよいに。余りできすぎていていつそ困ってしまう」

母が、こういった意味のことを父に訴えていたことがあった。

けれど年をとった祖母は、何事も憶くうになって来ていて、喜代のもの静かさとする早い働きを重宝がった。祖母は、仲間の年寄りには喜代のことを褒め、私に対してはたしなめる材料とした。

「知美ちゃ、あんたはもっと落着いて、静かなところを喜代に見習わんと、いつま

でもそんなお転婆さんでは村の笑われ者になりますよ。金がある、両親があると心を許していると、金もなければ親もない同然の喜代に負けを取りますぞ。喜代をごらんなさい、貧乏なこと不倅せなことが身にしみればしみるほど、心がしまつて来て慎しみが深くなるから、今日日はどこの村にいても、喜代ほど出来た娘はいませんよ」けれど私は、もっと外のことを考えていた。

「でもお祖母ちゃま、喜代はどうして清造のお嫁にはならなかったのです」

「清造の父やんが、喜代の親達が馬鹿だから、すぐ自分の家の身代に傷がつくことになるからって、承知しなかったのです」

「お直は、清造を好きだったのですね」

「あい、お直もその親達も、清造と一緒にしたかったです。お直は幸せ者でしたわ。喜代の親達が貧乏なおかげで、清造の嫁になれたわけでのう」

「喜代は、お直のことをしじゆう清造に話しておりましたよ」

「あの者らは、いつの間にかそんな深い仲になっていたのですかい。喜代も可哀いようなことをしました。でももう諦らめていようから、なにもいうのではありませんよ」